

総説

感情とコミュニケーション — オートエスノグラフィーを考える — Emotions and Communication: Exploring qualitative research through autoethnography

灘光洋子¹⁾
NADAMITSU, Yoko¹⁾

1)立教大学異文化コミュニケーション学部
1) College of Intercultural Communication, Rikkyo University

Abstract

The objective of this article is to explore the possibilities of qualitative research through inquiring into autoethnography (AE), which has recently been practiced in Japan. After briefly explaining the concept “empathy,” which AE values highly as a way to reach out to their readers, core ideas of AE research are discussed. Autoethnographers recognize the limits of conventional positivist assumptions about the nature of social reality and the production of knowledge. Being members of a particular cultural group, they use their own personal experience evoked by their feelings and emotions in research and writing. Their priority is to analyze and write reflexively to connect their experience and insights as insiders to larger cultural phenomena. The risks and concerns associated with balancing between personal, emotional and analytical views, including the issue of being self-indulgent, and the danger of revealing their own flaws, are also discussed.

要旨

小論は、最近日本でも実践され始めたオートエスノグラフィー(AE)について考え、質的研究の可能性を探ることを目的としている。まず、empathy(共感)という概念の足跡を概観し、AEの特徴について整理する。研究者が当事者としての体験を題材に、自身の感情に向き合い、分析し、書いたものを媒体として読者と「共感」で繋がりとうるのがAEである。研究者の客観性や中立性を所与のものとする従来の実証主義的研究のあり方に異議を唱えるオートエスノグラファーは、研究者の立場性に自覚的であると同時に再帰的に研究対象に向かいあうことを重要視する。自らが属する集団の一員として、感情想起的に自らの体験を書くわけだが、そのプロセスではインサイダーとしての内面的理解と研究者としての分析的視点が求められる。課題として、自己への過度な焦点化(自己耽溺、分析の不十分さ)、自己開示によるリスク(読者からの批判、関係者のプライバシー保護の問題)などが指摘されている。

キーワード: オートエスノグラフィー、感情、共感、再帰性

Keywords: autoethnography, emotions, empathy, reflexivity

1. はじめに

生命と健康に関わる情報収集や説明が行き交う医療現場で、明示的な言語情報が重要視されるのは当然だが、同時に、様々な場面で言語化が困難な感情的要素が関与してくることも否めまい。「伝える」というより、「伝わる」のが感情のコミュニケーションかもしれない。野口裕二と木下康仁(2022)が対談において、感情そのものを記述し、分析することの難しさを認めつつも、感情世界の重要性について言及しているように、対人コミュニケーションにおいて、感情のダイナミクスや共感は決して看過できない側面とあってよい。また、鯨岡峻は、学会誌での特集インタビュー(2020)で、質的研究とは行動科学では入り込めない領域に取り組むと同時に「研究者が黒衣にならない研究」(p. 64)であるとし、「研究者の立ち位置や研究者の主体性を明らかにすることから逃げる研究はもう質的研究とは呼べない」(p. 64)と言い切る。

一方で、論理や合理性を尊ぶ構造からこぼれ落ちてしまいがちな感性に絡む何かを伝えようとしても、研究という営みにおいては近代的理性に訴えるアプローチでなければ理解されにくいというジレンマがつきまとう。そうしたなか、近年、質的・解釈的研究において、実証主義的アプローチでは不可視化されてしまいがちな個人の内的世

界について探求がなされてきた。「主観的」と言われてきた人々の語りを分析対象とするナラティブ研究はその一つと言えよう。さらに、感情や感性を中核に据え、表現様式の「枠」を逸脱することで知の体制を揺り動かそうとする試みも見られるようになってきている。小論では、共感という概念の足跡を辿り、自らの感情、存在そのものを活用し、書く行為を通して他者と共感で繋がりとうとするオートエスノグラフィー(以下、AEと略す)について考えることで、質的研究の在り方について考える機会としたい。

2. 共感について

英語とギリシア語による“empathy”と“health professionals”をキーワードに、過去15年間(2004~2019)に渡る78本の論文を検索、レビューしたMoudatsou等(2020)は、医療者(助産婦、ソーシャルワーカーを含む)と患者の関係性向上にはempathy(共感)が不可欠で、治療効果や状況改善と密接に関係していると報告している。医療の場でもよく聞かれる「共感」という日本語は、英語圏から日本に入ってきたempathyの訳語だが、もともとはドイツ語のeinfühlungが始まりである(角田, 1998; 遠藤, 2014)。einfühlungは「感じ入ること(to feel into)」とか、「中で感じること(to feel within)」を意味し(バーガー, 1999)、1909年にアメリカの心理学者E. B. Titchenerによってempathyという英語に翻訳された(Wispé, 1987)。美術史家のウィント(1965)によると、1873年にロベルト・フィッシャーが著書で用いたのが最初で、フィッシャーの美学心理学は「同世代の美術史家のあいだに広い反響を呼んだ」(p. 137)という²⁾。その後、einfühlungは19世紀末期までドイツ美学のコンテキストで用いられていたが、20世紀初頭、ドイツの心理学者Theodor Lippsによって、審美的充足感とは対象そのものに宿っているのではなく、対象によって観る人の内部に生じる働き(internal activities)として捉えられるようになった(Wispé, 1987)。現在では、日常語でもあり学術用語でもある「共感」の起源がドイツ美学にあることは興味深い。

心理学、哲学、教育など幅広い領域で用いられる共感に統一した定義を与えるのは難しい。Eisenberg & Strayer(1987)は、自らが編集した共感に関する専門書において、所収論考で示された定義にも統一見解があるわけではなく、同一ではないかもしれないが他者の感情を我が事のように感じる経験、他者の情緒の経験への感情的反応など、感情面を中心とした定義もあれば、他者の否定的・肯定的体験を批判することなく理解しようとする試みなど、認知面をより意識した知見もあり、軸足の置き方には違いがあると指摘する。自他の区別に対する認識と共感の関係も論点の一つだろう。例えば、Hoffman(1982)は、子供は成長過程で自分と他者は別物であると認識するレベルが変化し、それが共感の在り方に影響を与えていると論じる。共感には知覚と認知が関与しているとする立場で、身体的(痛みを歪む顔や出血を見るなど)、象徴的(苦しい体験を綴った手紙を読むなど)、状況的(相手の立場に自分を置き換えてみるなど)刺激を自身の過去の記憶と直接結びつけることで共感が可能になるという。

Coplan(2014)は、他者の状況に置かれた自分を想像することで、他者の気持ちを推し量る(self-oriented perspective-taking)のは我々のデフォルトであり、ごく自然なことだが、あくまでも自分を中心に据えたこの視点は、他者の思いを感受すること(other-oriented perspective-taking)とは異なるという。自分との違いを考慮せず、他者を自分と同じように考え、感じる存在として捉えようと、相手を見誤ることにもなりかねない。換言すれば、他者に関する知識や状況の把握無くしては、自分とはかなり異質な環境や背景の相手の内面を感じることは困難ということになる。類似性と近接性に欠ける他者に共感を覚えることの難しさは誰しも経験があるのではない。感情の伴わない共感はある得ないが、共感のメカニズムには認知面が影響しているようである。

3. オートエスノグラフィーについて

感情や共感をコアとする研究アプローチとして、AEが最近日本でも注目され始めている。エスノグラフィーの一つの形態であるAEが出現するに至る経緯、およびAEの特徴について考えてみたい。

3.1 歴史的背景

1960年代から1970年代にかけてのアメリカは、第2波フェミニズム、ブラック・パワー、障がい者の権利、ベトナム戦争などをめぐる社会変動やカウンター・カルチャーの時代であった。同時に、ある集団が沈黙させられ差別的待遇のもとに生きることを余儀なくされることに対する異議申し立て、いわゆるアイデンティティ・ポリティクスが提唱されるようになった(Adams, Jones, & Ellis, 2015)。アイデンティティ・ポリティクスとは「周縁化されてきた人々が、集散的に共通する要因として特定の文化的・社会的・歴史的差異を掲げ、これに自己同定することによって手段としての社会的代表権を求める社会運動」(米山, 1998, p. 47)を意味する。このことはアカデミズムにおいても例外ではなかった。ポストコロニアリズム、ポスト構造主義、ポストモダニズムなどの知的運動を背景に、論理実証主義への批判が生まれることとなる。

主流であった客観主義的、植民地主義的な研究を疑問視し、研究対象やテーマの選択、描かれる他者の姿やイメージ形成には研究者の持つフィルターが関与せざるを得ないという意識が高まったのはこの時期である。研究対象である「彼ら」をどのように表象するかという過程に、研究者である「我々」と「彼ら」との個人的・文化的・歴史の関係性が重層的に関わっているとすれば、他者と自己を明確に区別した記述や分析は不可能である。誰が、誰について、どのような権威を持って語るができるのか、誰が「他者」を代表して語れるのかという問い、すなわち表象の危機(the crisis of representation)に向かい合うことになった(Adams, Jones, & Ellis, 2015)。この見方では、対象とは離れた研究者の立ち位置を前提とするのではなく、その立ち位置こそが研究結果に影響することを認め、研究者の価値中立性を否定する。研究者の立場性と再帰性が問われるこのような動きを背景として、ナラティブの視座が生まれ、AEへとその地平は広がっていった。

3.2 AEの出現と発展

AEという用語の指し示す範疇は広い。個人的語り、自己の語り、個人的経験の語り、個人的エスノグラフィーなど、類似した用語で称される研究も多く、その境界は曖昧といえる(エリス・ボクナー, 2006)。Karl Heiderが1975年に自文化について自ら報告した研究をAEと言及しているが、一般的に、David Hayano(1979)がこの用語の創始者とみなされている(エリス・ボクナー, 2006)。HayanoはAEを人類学者が自文化集団を対象に、彼らのアイデンティティやメンバーシップについて書いたエスノグラフィーであるとしている。自身が対象となる文化集団のメンバーである研究者は、完全にインサイダーであり、「当事者」といえる。1980年代になると、AEという用語は用いられなかったものの、社会学、人類学、コミュニケーション、ジェンダー研究などで、個人的ナラティブ、主観性や再帰性を重視した研究が出てきた(エリス・ボクナー, 2006)。AEの萌芽が見られるのは1990年代になってからのことで、その後、Handbook of Autoethnography (Jones, Adams, & Ellis, 2013)やAEに関する入門書(例えば、Adams, Jones, & EllisのAutoethnography: Understanding qualitative research, 2015)が次々と出版されるようになった。

病や障害の当事者体験をテーマにした代表的な著作としては、社会学者であるアーサー・フランク(1996)が心臓発作と癌患者としての体験をもとに書いた『体の知恵に聴く: 人間尊重の医療を求めて』、文化人類学者のロバート・マーフィー(1997)が脊髄の病で車椅子生活を余儀なくされた体験を綴った『ボディ・サイレント: 病と障害の人類学』が挙げられる。日本でも、脳性まひで小児科医・社会学者である熊谷晋一郎(2009)の『リハビリの夜』、盲ろう者で社会学者の福島智(2011)による『盲ろう者として生きて: 指字によるコミュニケーションの復活と再生』などが知られているほか、AEを方法論として明記した論文としては、障害者の姉妹を持つ体験をテーマにした沖潮(2013, 2016)、糖尿病患者の当事者である濱(2012)による研究などがある³⁾。

3.2 質的研究方法としてのAE

質的研究は、特定個人の体験、関係性、特殊性について、当事者の意図、感情、行為などに注視しつつ理解することを通して、それらの経験が埋め込まれた社会や文化に深く分け入ろうとする。AEもその例外ではない。しかし、研究者の立ち位置をどう捉えるかについては大きく異なる。一般的に、研究者は自分の体験や関心に沿ったテーマを選択しがちだが、そのことには触れず、あたかも自分と研究対象は切り離された存在として扱う傾向にある。価値中立性を保つ(装う)ことは実証主義的研究では当然視されており、医療コミュニケーション領域においても、このような研究への取り組みが主流といってよい。それに対して、AEでは研究者の個人的体験や主観を研究のデータとして用い、自分の経験を表現し、考察する。自文化に対して持っている感情や態度について取り上げることもあれば、自身のトラウマ経験、アイデンティティの葛藤、人生の転機を題材にすることもある。自分の感情を振り返り、呼び起こし、内省することで想起される個人的物語を、他者との対話のための媒体として記述するのがAEである(Adams, Jones, & Ellis, 2015)。

この過程で決定的に重要となるのが「書くという行為」だが、質的研究に携わる多くの研究者が熟知するように、書くことは技(art)といってよい。どのような様式(段階的構成、循環的展開、対話形式など)にするのかを含め、内省によって成される「研究」は書くことを通してAEというプロダクトを生む(Adams, Jones, & Ellis, 2015)。取り巻く環境を観察し、自己の内部を直視し、複雑かつ多様な思いを言語化し書くことが、自分を知り、他者の気持ちへの理解を深めることに繋がる。このように、AEでは、研究者と研究テーマの間に存在する分かれ難い親密性を、書くことによって前景化することとなる。事実を描くというより、むしろ書くことによって経験を意味付け、組織化することで、その出来事が自分にとってどのような意味を持っているのかを理解するといつてよい。

方法論としてのAEには2つの視座が内在する。ひとつは、個人的、直接的体験に根ざしたインサイダーとしての

知であり、もう一方で必要となるのが、自分の体験や思いを考察するという、研究者の俯瞰的視点の保持である。自分を対象化することによって得られる気付きと分析者としての視点を結合させることが必要となるが、ここで重要となるのが、研究に対する自分の立ち位置に自覚的であろうとする「再帰性」である。エリス・ボクナー(2006)は、「出来事が感情を伴って記憶されているものなら、たとえ昔のことで、思い出せるもの」(p. 151)と述べ、心も体も過去のある場面に戻ったかのように想像する「感情的想起」(p. 152)という方法を示している。同時に、場面に入り込んだり出たりという過程が、意味のあるAEを生む上で必要であり、自分の感情を、他者のもののように見ること、すなわち分析的視点の必要性にも言及している。

AEはエリスとボクナーが牽引してきたと言っても過言ではないが、一枚岩というわけでもない。主観性と客観性をめぐって、AEには二つの立場があるという(Chang, 2008)。Anderson(2006)は、感情を重視し読者との共感によるコミュニケーションを目指すAEを喚起的AE(evocative autoethnography)と呼び、より客観性を重視し理論の構築と洗練を志向する分析的AE(analytic autoethnography)⁴⁾を提唱することで、エリスとボクナーとは違う路線を示している。ただし、両者は明確に区別されるものではなく、多くのAEはこの連続体のどこかに位置すると考えられており(土元, 2021)、それはAnderson(2006)が、分析的AEが目指す一つの在り方として、マーフィー(1997)の『ボディ・サイレント』⁵⁾を高く評価していることからもうかがえる。通常、AEといえばエリスとボクナーを中心とする流れを指す。

3.4 AEの目指すこと

AEにも多様性があるが、AEを志向する研究者に通底する視座には、(1)知識への貢献、(2)現状への抵抗、(3)感情の重視と理解、(4)読者へのメッセージ性があるように思われる(Adams, Jones, & Ellis, 2015; Adams & Jones, 2018)。

回顧録、自分史、日記やブログとの違いは学術的な対話を行おうとしている点にあり、AEには現存の研究や理論の枠を広げ、主流派社会科学研究に対し、意識的に働きかけようとする構えがある。自己を題材とした分析と解釈の循環を通して自身が属する文化への理解が表現される(Chang, 2008)わけだが、それと同時に、社会的に不利益を被りやすい立場にある当事者による社会への批判性が含まれてもいる(濱, 2012)。例えば、当事者研究は、当事者による研究という意味でAEと重なるが、固有の特徴をある程度共有する少数派コミュニティの仲間と言葉を共同で立ち上げることを通して自分自身の理解に繋げる(綾屋・熊谷, 2010; 池田, 2013)という、ある種のエンパワメントを目的としている点が、AEとは若干異なるように思われる。オートエスノグラファーは、自分と身の回りに起こる出来事を題材に、文化実践や常識に挑戦しようとするわけだが、同時に様々な社会現象を理解したり、疑問を探究しようとする。自分自身の感情から目を背けず理解しようとすることで、これまで気づかなかった自己への気付きや自己変容への契機ともなり得るが、エンパワメント自体がAEの直接の目的ではない。

さらに、オートエスノグラファーがこれまで研究対象と見なされてこなかった独自の体験を提供することは、支配的言説への抵抗手段となり得る。センシティブなテーマであっても敢えて取り上げ、これまで周縁化されてきた文化的体験との対話の場となるようテキスト化することは、いわば、奪われた声を取り戻す試みと言ってもよい。

こうした読者との共感を通して、理解や救いに繋げようとするような作品との出会いを、小倉(2014)は「・・・生きる力につなげてくれたのは、定式化され細分化された専門知ではなく、そのもっと根っこにあって知の意味・学問の意味の基盤となっている、他者の「生きられた経験」との出会いであった」(p. 26)と表現している。AEだけでなくアートベース・リサーチの実践者でもある岡原(2014)は、共感による繋がりには、ある種の「感情公共性」(p. 122)が立ち上がるのが大切であるという。

そのために、表現手法を創意工夫し、多様な読者にメッセージを届けようとする。エリス・ボクナー(2006)が厳密な分析と芸術性を兼ね備えることは可能と主張するように、アカデミズムに囚われることなく、一般の読者も関心を持つような文体や、読者が親しみを持てるメディアを利用することにも積極的である。言葉の限界から他の手法、例えば、音楽、写真、絵画、ドラマ・パフォーマンスなどに表現の枠を広げることで発展したのがアートベース・リサーチで、AEとは地続きにある。

3.5 AEの課題

AEに対する批判も多々ある。対話的自己エスノグラフィー⁶⁾を実践する沖潮(2013)は、これまで指摘されてきた様々な批判点を、記憶に頼ることによるデータの信頼性の問題、文学性の欠如(書き手としての力量不足)からくる単調さ、物語を語ることへの依存による分析の不十分さ、自己への過度な焦点化の4点に整理している。自分自身をデータとすることから、自己耽溺に陥る可能性を指摘するEriksson(2010)は、「研究者」と「経験を生きる自

分」との間に一定の「距離」を保つ必要性を強調する。主体であり客体でもあるという立場の二面性には十分留意し、自分を再帰的に探求することが求められよう。また、AEは不特定の他者に自分を晒すというリスクを孕んでいることも忘れてはならない。自己開示によって被る批判の可能性だけでなく、自らの体験について内省し語ることに伴う感情的痛みも否定できない(Eriksson, 2010; Adams, Jones, & Ellis, 2015)。自分を語るということは、周りの他者についても書くということに他ならず、そうした関係者のプライバシーを守るという倫理面に留意する必要もある(Adams, Jones, & Ellis, 2015)。

4. おわりに

AEを初めて耳にしたのは、1997年モントリオールで開催された国際コミュニケーション学会での発表セッションだった。アジア系留学生が自分の留学生としてのアメリカでの体験を日記で綴ったものをデータとし、AEの手法を用いて発表していた。当時のコミュニケーション研究では、信頼性、妥当性の担保は必須と考えられており、質的研究も実証主義的アプローチの影響が色濃く、その留学生が自分自身を題材に、“I”（私）を主語として書き、発表していたことに少なからず衝撃を受けたことを覚えている。あれから四半世紀が過ぎ、AEの認知度は増してきた。ただ、依然として実験的試みとして受け止められる傾向も強い。何が実験的なのか、そしてどのような可能性を秘めているのだろうか。

描きたい、書かざるを得ないという思いの強さ、敢えて自分を題材にし、開示することで（あるいは開示するリスクを冒してでも）訴えたい何かを感じる時、読者は動かされる。同時に、AEには研究者ならではの分析レンズを通して支配的言説に切り込む、あるいは読者に新たな視座を呈示することが求められる。単なる感情の吐露や自己満足・陶醉に終わってはならないことはいまでもない。分析を通して、当事者でなければ語れない何か可視化される時、初めて知的貢献と受けとめられるのではないか。勢い、テーマはトラウマ、病、障害、喪失、差別、偏見など社会的に弱い立場にある当事者としての体験が中心になることが多い。書くことで新たな解釈が生まれ、これまでとは異なる景観が開ける契機ともなり得るが、一方で自分を開示するのは痛みを伴う行為ともいえる。自分をえぐり、当事者としての主観的世界、感情的側面を差し出すには相当の覚悟が求められよう。AEというアプローチが研究者に突きつけるものは大きい。

また、AEは多様な読者と接点を持つようとするため、書き手には文体と構成に工夫と熟達求められる。研究者としての分析力と物書きの筆力が求められるわけだが、分析結果の表現方法には幅があり、従来の社会科学系論文で用いられる構成様式に則って書かれたものもあれば、詩や戯曲を取り入れ注釈や後注によって分析を示すもの、あるいは小説に近く文学との境界線が非常に曖昧な作品もある。AEに取り組む際には、自分がどのようなAEを志向するかを念頭に置きながら進める必要がある。

このように誰でも手軽に着手できるとは言いがたいが、AEという研究アプローチによって気付かされる点は少なくない。まず、専門家として一段上に立った目線ではなく、共感によって読者に理解を広めたいとする姿勢、そして背後には、現実を変えたい、変えなくてはならないとの強い思い、社会に対する批判的見方がある。共感自体が目的というより、自分事として捉える社会的想像力に結びつけることで、他者と連帯し、変革を求めるムーブメントへの土台となることにこそ意義があるように思える。読者に再考を促そうとするこの批判的視座は、実証主義的トレーニングを受けてきた（筆者のような）研究者に、再帰的に研究テーマと対話し、何のための研究なのか、どのように取り組むべきかなどを、改めて問い直す機会を与えてくれる。研究の公表に多様な表現方法を取り入れるなど、柔軟な姿勢は新鮮でもある。

流動的で、その時、その場で生成する感情は捉え難い。そのため、排除する、あるいは概念化し、固定化することで観察可能な形にしてきたのが、これまでのコミュニケーション研究であったかもしれない。感情に真っ正面から向かい合い、なんとか読者と繋がりようとするこの研究アプローチから学ぶものは確かにあると思えるのである。

注

1. 筆者は2021年3月に立教大学異文化コミュニケーション学部を定年退職し、現在は同大学同学部で非常勤講師として教鞭を執っている。
2. 翻訳者の高階秀爾氏は“*einführung*”の訳語を「感情移入」としている。角田(1998)によると、英語 *empathy* に訳され、日本に入ってきた当初は「感情移入」と訳されたが、次第に「共感」と表現されるようになったという。
3. 医療関連ではないが、方法論としてAEを明記した研究書として、自身がアイヌの出自である体験を書いた『「沈黙」の自伝的民族誌：サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』（石原, 2020）、越境による言葉とアイデ

ンティティについてのAEを収めた『移動とことば 2』(川上、三宅、岩崎, 2022)が刊行されている。

4. Anderson(2006)は、分析的AEの特徴として、研究者が(1)特定の文化集団の一員であること、(2)再帰的に自己分析に取り組むこと、(3)ナラティブに可視化された存在として描かれること、(4)他の同文化メンバーの声もデータとし協働的であること、(5)理論的分析に貢献することの5点を挙げている。
5. マーフィー(1997)の『ボディ・サイレント』は、脊髄の病で四肢まひになった自らの内的世界を赤裸々に語ると同時に、そのような体験を異文化体験と位置づけ、「リミナリティ」、「通過儀礼」、「スティグマ」などの知見と関連づけることで鋭い分析的切れ味を見せてくれている。
6. 対話的自己エスノグラフィーは、研究者が対話者と語り合うことを通して、研究者自身の心的世界を探ろうとする手法である。詳しくは、沖潮(2013)を参照のこと。

謝辞

シンポジウム発表において、示唆に富む質問を投げかけてくださった藤崎和彦先生、発表内容に関心を寄せてくださった野呂幾久子先生、土屋慶子先生、そしていつも大事な局面で支えになってくださる阿部恵子先生に心より感謝申し上げます。

研究資金

なし

利益相反自己申告

なし

引用文献

- Adams, T. E., Jones, S. H. & Ellis, C. (2015). *Autoethnography: Understanding qualitative research*. Oxford University Press.
- Adams, T. E., & Jones, S. H. (2018). The art of autoethnography. In P. Leavy (Ed.), *Handbook of arts-based research*. (pp. 141-164). NY: Guilford Press.
- Anderson, L. (2006). Analytic autoethnography. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35(4), 373-395.
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎(2010).『つながりの作法:同じでもなく 違うでもなく』日本放送出版協会.
- バーガー, D. M. (1999).『臨床的共感の実際:精神分析と自己心理学へのガイド』(角田豊・竹内健児・安村直己・西井克康・藤田雅子・訳).人文書院.[原著:Berger, D. (1987). *Clinical empathy*. Jason Aronson Inc.]
- Chang, H. (2008). *Autoethnography as method*. Left Coast Press.
- Coplan, A. (2014). Understanding empathy: Its features and effects. In A. Coplan & P. Goldie (Eds.), *Empathy: Philosophical and psychological perspectives* (pp. 3-18). Oxford University Press.
- Eisenberg, N, & Strayer, J. (1987). Critical issues in the study of empathy. In N. Eisenberg, & J. Strayer (Eds.), *Empathy and its development* (pp.3-13). Cambridge University Press.
- エリス, C. ・ボクナー, A. (2006). 「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性:研究対象としての研究者」(藤原顕・訳) N. K. デンジン・Y. S. リンカン編(平山満義・監訳)『質的研究ハンドブック 3巻 質的研究資料の収集と解釈』北大路書房, 129-164 頁. [原著: Ellis, C. , & Bochner, A. (2000). Autoethnography, personal narrative, reflexivity. In N. Denzin & Y. Lincoln (Eds.). *Handbook of qualitative research*, pp. 733-768]
- Eriksson, T. (2010). Being native: distance, closeness and doing auto/self-ethnography. *Art Monitor*, 8, 91-100.
- 遠藤由美(2014).「社会的文脈から共感を考える」梅田聡(編)『岩波講座:コミュニケーションの認知科学 2巻 共感』(79-99 頁). 岩波書店.
- フランク, A. W. (1996).『体の知恵に聞く:人間尊重の医療を求めて』(井上哲彰・訳). 日本教文社. [原著: Frank, A. W. (1991). *At the will of the body: Reflections on illness*. Houghton Mifflin Company.]
- 福島智 (2011).『盲ろう者として生きて:指字によるコミュニケーションの復活と再生』明石書店.
- 濱雄亮 (2013). 「自己エスノグラフィの実践と医療人類学における活用」『文化人類学研究』第13巻, 15-31 頁.
- Hayano, D. (1979). Autoethnography: Paradigms, problems, and prospects. *Human Organization*, 38, 113-120.
- Hoffman, M. L. (1982). Development of prosocial motivation: Empathy and guilt. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior* (pp. 281-313). Academic Press.
- 池田喬(2013).「研究とは何か、当事者とは誰か:当事者研究と現象学」石原孝二(編)『当事者研究の研究』(113-149 頁).

医学書院.

- 石原真衣 (2020). 『「沈黙」の自伝的民族誌：サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版会.
「インタビュー パイオニアに聞く 鯨岡峻」(2020). 『質的進学フォーラム』第12号, 58-65頁. 日本質的心理学会.
- Jones, S. H., Adams, T. E., & Ellis, C. (Eds.). (2013). *Handbook of autoethnography*. Left Coast Press.
- 角田豊 (1998). 『共感体験とカウンセリング：共感できない体験をどうとらえ直すか』福村出版.
- 川村郁雄・三宅和子・岩崎典子 (編) (2022). 『移動とことば 2』くろしお出版.
- 熊谷晋一郎 (2009). 『リハビリの夜』医学書院.
- Moudatsou, M., Stavropoulou, A., Philalithis, A., & Koukoulis, S. (2020). The role of empathy in health and social care professionals. *Healthcare*, 8(1), 26. Retrieved September 13, 2022, from <https://www.mdpi.com/2227-9032/8/1/26>
- マーフィー, R. F. (1997). 『ボディ・サイレント』(辻信一・訳). 新宿書房. [原著: Murphy, R. (1987). *The Body Silent: The different world of the disabled*. Henry Holt & Company, Inc.]
- 野口裕二・木下康仁 (2022). 「対談 質的研究とナラティブ」木下康仁(編)『N: ナラティブとケア』第13号 (2022年1月), 3-16頁. 遠見書房.
- 小倉康嗣(2014). 「生きられた経験へ：社会学を「生きる」ために」岡原正幸(編著)『感情を生きる：パフォーマンス社会学へ』(14-36頁). 慶應義塾大学出版会.
- 岡原正幸(2014). 「喘息児としての私：感情を生きもどすオートエスノグラフィー」岡原正幸(編著)『感情を生きる：パフォーマンス社会学へ』(75-123頁). 慶應義塾大学出版会.
- 沖潮(原田)満里子 (2013). 「対話的な自己エスノグラフィ：語りを通じた新たな質的研究の試み」『質的心理学研究』第1号, 157-175頁.
- 沖潮(原田)満里子 (2016). 「障害者のきょうだいが抱える揺らぎ：自己エスノグラフィにおける物語の生成とその語り直し」『発達心理学研究』第27巻, 第2号, 125-136頁.
- 土元哲平 (2021). 「キャリアと文化の心理学 (3) オートエスノグラフィーの特徴と主流の方法論」『対人援助学マガジン』第44号, 261-263頁.
- ウイント, E. (1965). 『芸術と狂気』(高階秀爾・訳)岩波書店. [原著: Wind, E. (1963). *Art and anarchy*. London: Faber and Faber.]
- Wispé, L. (1987). History of the concept of empathy. In N. Eisenberg, & J. Strayer (Eds.), *Empathy and its development* (pp.17-37). Cambridge University Press.
- 米山リサ(1998). 「文化という罪：「多文化主義」の問題点と人類学的知」青木保 他(編)『岩波講座文化人類学 第13巻 文化という課題』(41-66頁). 岩波書店.

*責任著者 Corresponding author : 灘光洋子 (e-mail: yokonada@rikkyo.ac.jp)